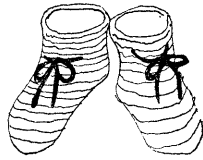


近代短歌に現われた子ども

(八)



大塚
雅彦

(15) 古泉千樫
こいずみちかし

千樫の本名は幾太郎、明治十九年、千葉県安房郡吉尾村（現鴨川市）の農家に生まれた。高小卒業後、母校の代用教員となり、更に千葉教員講習所を卒えて、郡内の小学校に勤めた。同四十一年教職を辞して上京、帝国水難救済会に勤務した。昭和二年八月、肺結核のため東京・青山の自宅で没した。四十二才である。

短歌は少年時代から「心の花」「万朝報」等に投稿したが、「馬酔木」投稿が伊藤左千夫に認められ、その門下となる。「アララギ」創刊とともに参加、その編集にも従事したが、大正中期「アララギ」が島木赤彦を中心にする頃より疎遠となり、大正十三年「日光」が創刊されるや、これに加わって同人となり、「ア

ララギ」を離れた。大正末年に門下と「青垣会」を結成したが、「青垣」の創刊を見ることなく死去し、同誌はその後、創刊号（昭2・11）を「古泉千樫追悼号」として刊行された（同誌は今日も弟子の橋本徳寿氏により継続されている）。

彼の歌風は初期から安定していて温順、端正で、すぐれた技巧を示したが、感覚もすどく、柔軟で滋味ある作品をつくった。また、小市民的なかげりのある生活感情の描出にも特色がある。彼の詠風に「東洋的な諦念」「受動的な詩的精神」「視野の狭少」「通俗的な感傷性」等を指摘する見解（国崎望久^{もちく}、久太郎『近代短歌史研究』昭和35・3所収「千樫の生涯と芸術」）もあるが、「歌の道は結局一人の道である」と晩年自ら歌集巻末に記したように、孤独と貧窮のさびしさの中に、平淡ながら透徹した歌境をひらいて世を去った。生前唯一の自選歌集『川のはとり』（大正14刊）があり、没後、門下の手により『屋上の土』（昭3刊）、『青牛集』（昭8刊）が刊行された。編著や、随想集もある。なお橋本徳寿・安田稔郎編

『定本古泉千樫全歌集』（昭37）もあるが、全集は未だない。

①ぬばたまの夜の海走る船の上に白きひつぎをいだしわが居り

②秋の稲田はじめて吾が児に見せにつつ吾れの眼に涙たまるも

③五百重山夕かげりきて道さむししくと子は泣きいでにけり

④な病みそまづしかりともわが妻^{つま}子米^{こめ}の飯^{めし}たべただすこやかに

⑤おもてにて遊ぶ子供の声きけば夕かたまけてすずしかるらし

⑥みなぎらふ光のなかに土ふみてわが歩み来ればわが子らみな来つ

①は『屋上の土』所収。大正三年作で、「柩を抱きて」一連五十七首中の歌である。この年一月、作者は前年十月生まれたばかりの次女條子を亡くした。その亡骸を遺骨にして帰郷して葬った折の作。東京湾を海路渡って帰

省したのであることが、この歌でわかる。「ぬばたまの」は「夜」の枕詞。小さな白木の箱を抱いて悄然と夜の船上に居る作者の姿が見えるようである。上田三四二氏は、この一連には全体として「死にたまふ母」など茂吉の影響がつよいが、抄出の歌はまぎれもなく千櫨の世界……と、述べている（上田『鑑賞古泉千櫨の秀歌』（昭51・7）。「しみじみとはじめて吾子をいだきたり亡きがらを今しみじみ抱きたり」「わが膝に今はいだけとたまきはる分けし命はほろびけるかも」等の歌がこのあと続いており、千櫨の悲しみが偲ばれる。ちなみに彼は、この次女の死んだ日に、宮城県下に居た原阿佐緒宛に「死に顔いままでになく美しく可愛くかなしくたまらず候何もかもみんな小生がわるく候 ただ涙ながれ候」と書き送っている（小野勝美『原阿佐緒の生涯——その恋と歌』（昭49・11））のである。

②も『屋上の土』所収。大正四年作で、「郊外」一連の最初の歌。作者はこの年八月、住み馴れた東京・本所から郊外の青山穩田に移った。その頃は青山辺もこうし

て稲田がひろがっていたのであろう。この「吾が児」というのは当時五才の長女葉子である。下町に育った幼な子も、広々した稲田などを見るのは始めてである。作者は農家の長男として生れながら、今も田畑に働く両親を郷里にのこして来た。しかも、この子どもの母親きよとは、もともと年上の人妻であったので郷里では成就しがたい恋であったが、とも角お互いに上京して添いとけることが出来た。そして、貧しいながら市井で生活している親子三人の自分たち……。来し方行く末を思い、三十才の壮年にさしかかった作者は「複雑な感動が胸にこみあげて心中滂沱たるものがあつたであらう。訥々と句切るる声調に詠嘆の泌みとおるものがある」（橋本徳寿『古泉千櫨とその歌』（昭14・11））といえよう。長男である身で郷里に親を置いて出京し、東京であくせくと生活して風塵に老いた私自身も、この②の歌を誦する毎に、作者と同じように「眼に涙たまる」思いを常に抱くのである。

③も同じく『屋上の土』所収。「児を伴ひて郷に帰る」

という題のある七章六十二首の大連作中の一首であるが、この連作の製作年次については、はっきりしない。

大正六年十一月帰省時の作という橋本徳寿説と前年（大正五年）十一月末か十二月初め頃のこととする柴生田稔説とがあるからである。橋本説はこの一連の大部分が発表されている「アララギ」初出と合わない、という柴生田説（中央公論社版『日本の詩歌』6「古泉千樞」へ昭44・5）所収の柴生田稔氏の鑑賞の方が正しいようである。この折、千樞は六才の長女葉子を連れて帰省した。次女條子の遺骨を抱いての帰郷時と同じく、海路、汽船で行ったらしい。保田保に上陸した時は夕暮が迫り、俣も馬車もなく、郷里の吉尾村まで五里の山峡の夜道を、幼児の手をとって歩かねばならなかった。既に陽のかげった山道を歩く心細さ。暗くなって人通りもなく、きこえるのは親子の足音ばかり。夜となれば寒さもしのび寄ってくる。山の斜面はシルエットの如く暗い（「五百重山」は幾重にも重なり合った山々のこと）。とうとう子どもはシクシクと泣き出してしまった。しかし、がま

んさせて歩き続けねばならない。父の私もその悲しさに堪えているのだ——そんな作者のつぶやきがきこえるようである。この歌の前後には「わが兄よ父がうまれしこの国の海のひかりをしまし立ち見よ」「山の上に月はいでたり汝なが知れるかのよき歌をうたひつつ行かむ」等の作もある。「おてて つないで」の歌でも唄って行ったのであろうか……。

④は『青牛集』所収。大正七年作で「向日葵」一連の末尾の歌。「八月十四日の夜東京にも米騒動おこれり」の註記がある。この年七月、第一次世界大戦下の経済状況による物価騰貴、特に米価暴騰で人心動揺し、富山県下で米屋襲撃事件が起り、全国に波及し、遂に八月半ばには東京にも始まった。そうした不穏な社会を背景にこの歌は作られている。「な病みそ」は「病んでくれるな」という禁止的な願望といえよう。深川八幡の祭礼もこのため延びたことが、続く「この街の祭のびけりそろひ衣きたる子どもの群れつつ寂し」の歌でわかる。「異国まへたべむとはすれ病みあとのからだかよわき児らを思へ

り」という作もある。異国米、つまり朝鮮米を食べたのであって、翌八年作に「石多き米を食はみつつ寂しけれ子らはこの冬すこやかにあり」というのがあり、石が多く不味い米であつたらしい。米騒動という歴史的事件を背景にした市民生活を詠じている点で、千櫨のこれらの作品は珍らしいものである。

⑤も『青牛集』所収で大正十三年作。「稗ひなの穂」十一首中の四首目である。千櫨作品の中では最も世に知られている歌であり、近代短歌史にのこる名作である。千櫨はこの頃、結核の病状あらわれ、この年七月臥床し、医師から絶対安静を命ぜられ、八月末には咯血した。だが、この歌は病状がややおちついたとき作られたのである。橋本徳寿氏は、千櫨がこの年の十月から十一月にかけて一時帰郷療養したので、その間にこの「稗の穂」一連を作ったように述べている（橋本、前掲書）が、これは、上田三四二氏も言うように明らかに東京の自宅で作ったもので、製作時期は「帰郷以前、すなわち咯血時から十月に到る間であつた」（上田、前掲書）ろう。げ

んに本林勝夫氏なども「崖下の二階でじっと仰臥していると、表の通りで遊ぶ子供の声がひっきりなしに聞えてくる」と、都会の街なかのように鑑賞している（本林『近代歌人』（昭57・3）。「夕かたまけて」は、夕方になつての意。故谷馨は「へすずしかるらし」には「ああ自分も元気ならば外に出て、その涼氣にふれたい——という気持が、余情として籠っている……。病者の哀しいへあこがれ」とも言うべき心の動きがここに存している」と述べている（谷、前出『現代短歌』）。

これは病臥のうたでありながら、不思議と暗い感じがしない。むしろ澄みとおつたような作者の心境に冴えのようなものすらが感じられる。床の中で暑い日中をじつと病臥していた作者、表の通りで遊んでいる子供たちの声をききながら時間の経過を静かに感得している。暑かった陽もかたむき、残暑の一日も昏れようとし、涼しさがしのび寄ってくる気配——それを感じている作者のしみじみとした心情が、リズムミカルな一首の調べと共に、水の浸みるように読者の胸にも浸透してくるのである。

正岡子規や長塚節のような先人たちの晩年のすぐれた病床詠があるが、千櫨のこれはそれらとはまた異なるおもむきのある秀作であるといえよう。

なお上句の「遊ぶ子供の声きけば」は、『梁塵秘抄』の影響があることを諸家が指摘している。すなわち巻二の「遊びをせんとや生れけむ、戯れせんとや生れけん、遊ぶ子供の声きけば、我が身さへこそ動かるれ」の第三句である。千櫨はこの歌を作ったあとで、そのことに気付いたことを、自ら述べたという（橋本、前掲書）。秘抄のこの歌は「平生罪深い生活を送っている遊女が、みづからの沈淪に対しての身をゆるがす悔恨をうたったものである」（小西甚一『梁塵秘抄考』昭16・11）とか、「江戸期などとは違う生れながらの遊女の口吻が感じられるように思う」（西郷信綱『梁塵秘抄』（昭51・3））とかの見解があるが、単純に、子供の遊びを見てその純粋さに常人が感動している歌と見ても味わい深い。この歌の影響は以外に広く、例えば斎藤茂吉の「うつつなるわらべ専念あそぶこゑ巖の陰よりのび上り見つ」（『あらた

ま』）や、北原白秋の『一心に遊ぶ子ども声すなり赤きとまやの秋の夕ぐれ』（雲母集）等がその例であることを夙に新聞進一氏などが指摘している（新聞『歌謡史の研究その一今様考』昭22・11）。

⑥は『青牛集』所収で昭和二年作。「病牀春光録」一連の中にあり「三月三十一日、八十幾日ぶりに外に出づ」の詞書がある。逝去四ヶ月あまり前の一連で、生前に発表した最後の作になった。病臥から起きて久しぶりに青山墓地辺まで歩いたらしい。もう春が来ており、あまねく地上にみちわたる春の光、珍らしい父の外出を喜び、父の身を気づかい乍らもはしやぎつつ、ついでくる三人の娘たち（千櫨は四人の娘があつたが次女は夭折。末女玲子はこの歌の製作時には未だ満五才）。千櫨は余命いくばくもない己れの身体とおもいつつ、いとし子供たちを見つめていたかもしれない。心にしみる作品である。

(16) 釈迢空

本名は折口信夫^{しのぶ}。明治二十年、大阪府西成郡木津村（現大阪市浪速区鴨町）の生薬屋^{せいやくや}に生れた。天王寺中学を経て国学院大学卒業。今宮中学校教員を経て母校国学院大及び慶大の教授を長くつとめた。生涯独身を通し、弟子の藤井春洋^{はるひ}を養子にしたが、彼は陸軍将校として硫黄島で戦死した。迢空は昭和二十八年九月、胃癌のため逝去、六十七才であった。

短歌は早く「文庫」で服部躬治^{もろはる}の選をうけ、明治四十二年から根岸短歌会に出席、大正六年「アララギ」同人となり、選歌も担当した。のち大正十年「アララギ」を離れ、十三年「日光」創刊に同人として参加。しかし、生涯結社を主宰することなく歌壇から独立して独自の詠風をつらぬいた。歌集は『海やまのあひだ』等の五冊がある。その歌には句読点が打たれているのが特色である。作品は民俗学的学識に裏うちされ、自然や人生に対する観照の深さや、土地に根づいて生きる人々の生きざまを詠み据えたものや、旅のおもいを郷愁の如く記録する等、ユニークな風格を示している。民俗学的方法に立

脚する国文学の業績も顕著で、多くの研究書を刊行。また、「死者の書」のような小説、『古代感愛集』等の詩集もあり、評論「歌の円熟する時」は短歌滅亡論として知られる。その全業績は中央公論社版『折口信夫全集』全三十一巻に収められている。

① わらはべのひとり遊びや。日の昏るる沢のたぎちに、うつつなくあり

② 村童晝すさまじく遊ぶなり。田にとぶ虫も多く喰はれつ

③ 道祖神^{みちのぼ}まつり過ぎてしづまる村の子のそぶりさびしくなりまさるなり

④ 今の世の幼きどちの生^{なま}ひ出でて問ふことあらば、すべなかるべし

①は『海やまのあひだ』（大正14刊）所収。初出未詳なので、この一連「木地屋の家」前半（初出「日光」大正13・4）と同じく大正十二年の作か。歌集編集時に加えられた。木地屋というのは、塗物の木地などを作る職人であり、「世ばなれした山間の僻地に小屋がけして住

んでいる流浪の民」で、作者は「大正九年の奥遠州の旅で山間を歩いてゐる時に、そうした生活者のすがたを見たり聞いたりしたもの」（木俣修、前出『近代短歌の鑑賞と批評』）。恐らく木地屋の子供らしい山の子が、友もなくひとり遊びをしていて、沢の激ちを見ながらぼんやりしている、その姿に作者は哀れを感じたのだろう。

②は歌集『春のことぶれ』（昭5刊）所収。「上州河原場」と題する一連の中にある。貧しい村の子ども達は昼間、心あららかに遊ぶので、その子ども達に、田を飛んでゆく虫すら（蝗いんたなどを指すか？）も沢山捕えられて食べられてしまった、というのである。この歌の前に、今年は早く雹が降って農作物も傷めつけられてしまった、村内には「旅廻り踊り子や芸人の村に入ること禁ずる」旨の貼り札が辻々にしてある、という作品もある。収獲も乏しい貧しい山村のわびしい生活と、その子供たちの生熊が、民俗に強い関心を持ち続けた作者によって鋭くとらえられている。③は歌集『遠やまひこ』（昭23刊）所収で、「山の端」一連の中の歌。この一連は、

伊豆の田方郡田中村（現大仁町）に住む穂積忠（北原白秋門の歌人、昭和29年没。歌集『雪祭』がある。逄空にも深く私淑した）の境涯を思い、その人の身になって作ったものという。道祖神まつりは一月十五日前後に行われる田舎の子供の祭で、いわゆるドンドロ焼であり、私なども村で暮らした幼年時代、これに参加したなつかしい思い出がある。その祭も終り「村中がざわめいているような時が過ぎると、つき物が落ちたようにひっそりとしてしまった村の子のそぶりが、一層さびしく見えて、村の大人の心をさびしくさせる」（千勝重次・岡野弘彦『逄空』昭36・11）。そんな風景がよく描かれている。④は歌集『倭をぐな』（昭30刊）所収。「思ひを次の代によす」と詞書のある連作中の一首で、昭和二十一年作である。今この幼い子供たちが成長した後、この戦いについて尋ねることがあったら、われわれはそれに対して答える術がないだろうという意で、終戦直後の昏迷の世相の中で作者の戸惑いや真摯な反省や、更にはひそかな決意すらがうかがわれて、感銘深い一首である。